

第9章 もうひとりの教師——学習環境

学習環境は、まさにもう一人の優秀な教師と言えます。

教師があくせくと動き回ってグループごとにカンファランスしている一方で、学習環境という教師は一人ひとり子どもたちを迎え入れ、子どもたちのニーズに応じて、必要な支援が得られるように取り計らってくれます。しかも、お節介な教師のように、丁寧すぎる対応や嫌味を含んだ助言はしません。

嫌な顔一つ見せずに、何度でも、何人でも対応しています。また、子どもたちに対して、自分から学習を進めているという自信と自立心を育ててくれます。学習環境は、子どもたち自身が社会科ワークショップに手を伸ばすまで、じっくりと待っています。学習環境は、子どもたちだけでなく、私たち教師を支えるもう一人の、重要なパートナーとなっているのです。

では、学習環境に頼れない教師はどうなってしまうのでしょうか？ かつての私のように、学習環境に頼ることのできない熱心な教師は、学習に必要なことはすべて教師から発せられるものである、と考えていました。そのため、全体指導の時間が増え、言葉も多くなりました。

子どもたちはというと、学習を進めるためには教師が出すものだけを頼りにしなければなりません。とはいえ、学習に必要な情報を教師一人がもちすぎていることが多々あります。子どもたちは、学びたくても教師が資料を独占しており、もったいぶって小出しにするために、教師が進める授業のペースに合わせるしかできません。

それが「ちょうどいいペースだ」と感じる子どももたまにいます。しかし、ほとんどの子どもには遅すぎたり早すぎたりするペースとなり、結果的に、教師に合わせる適応力を身につける学習と化してしまうでしょう。

このような教師ほど、自分が熱心につくった授業計画通りに学習を運ぼうとして情報を制限し、子どもの学習ペースを調整しようとしてしまいます。それが理由で子どもたちは、テーマの探究のために自分で調査してきたり、意見を準備するといった必要がなくなります。口を開けていれば、おいしい料理がどんどん飛び込んでくるような授業と言えます。

実は、ほとんどの子どもたちは今までそのような教室で学習することを当然として進級してきたため、教師が学習内容の情報を独占していることに対して何の不満も抱いていません。「学習は先生から授けられるもの、授けられたものを食べるのが子ども」という環境で生活してきたわけですから、教師の独占状況は疑う余地のない当たり前の日常なのです。

しかし、本当にそのような状況でよいのでしょうか。このような状況で、社会科の目的となっている民主的な教室、自立的な市民を育てることはできるのでしょうか。教師が調理したおいしい料理の味を子どもたちが知っているのであれば、あとは子どもたちに学習の主導権を委ね、子どもたち自身が探究という調理法を学びとる必要があります。そのほうが、子どもたち自身もはるかに成長するはずです。学習環境を整え、自立的に学ぶ子どもたちを育む教室をつくりたいものです。

教室内の環境

表9・1 子どもたちが利用する資料や記録をするための道具

利用する資料	記録をするための道具
本(可能なかぎりたくさん)	ノート
印刷した資料を入れておくファイル	ポートフォリオ用ファイル
インターネットにつながる端末	プリンター
DVDや動画データを見るための機材	カメラ
過去の子どもたちがつくった制作物	ホワイトボード
その他たくさん	その他いろいろ

子どもたちが利用する資料

子どもたちの自立的な学習を支える基本的な学習環境は、本や教材などの子どもたちが調べることのできる資料です。テーマに関する本は、学校図書館はもちろん、公立図書館の団体貸出を目いっぱい使って資料を揃えていきます。私の勤務している自治体であれば、教師1人につき40冊を1か月間借りることができるので、1か月に1回程度は図書館に足を運んでいます。

図書館司書に依頼し、子どもが興味をもちそうなテーマに関する本を集めておいてもらいます。言い換えれば、どのような図書資料を揃えるかによって、ある程度子どもたちの学習範囲を教師が調整することができるということです。これも、教師の大切な支援の一つとなります。

子どもたちが読みやすいと思う本が揃えられればよいですが、いつもそうなるとはかぎりません。そこで、副読本として自治体から配付されている「わたしたちの〇〇」といった小中学生用の地域学習のための資料集を図書館で借りて、必要な箇所をコピーして何冊か揃えることもあります。

大人向けの本でも子ども向けの本でも、写真や図表がたくさん掲載されているものであれば、子どもも関心をもちやすいです。教師や学校司書が参照してほしいページに付箋を貼って、そのページに書かれていることを学べるように工夫しました。たとえば、梨本先生の教室(第3章参照)では、スーパーマーケットやコンビニエンスストア、八百屋さんの仕事などが書かれているページ、そして運送や鮮度管理、接客におけるユニバーサルデザインなど、子どもに気づいてほしい箇所に付箋が貼られていました。

インターネット上で使えるような資料は印刷をしておき、欲しいと思う子どもが自由に取ったり、カンファランスに応じて手渡したりできるように準備しておきます。とくに必要でないかぎり、全員に資料を配るようなことはしません。子どもとのカンファランスの流れで、もっと学習を深めてほしい場合に用意したり、停滞している子どもたちへのカンフル剤として資料を渡したりしています。そのほうが、自分たちだけが持っている資料ということで、発表への意欲が高まり、大切に扱ってくれるのです。ファイルや書類ケースに分類しておき、いつでも渡せるように準備しています。

インターネットにつながるPCを教室で用意できる場合は、ブックマークなどで、子どもたちが分かりやすいサイトにアクセスできるようにしておくといでしょう。また、教室のテレビに調べている画面を映しておくことで、子どもたちの調べている今の様子が見えやすくなり、ほかのチームの学習を可視化できます。一度にいくつかのグループにカンファランスをする際にも、大画面でインターネットのサイトを映したほうが分かりやすくなります。

短編の動画なども同様に準備しておく、子どもたちはイメージをもちやすくなります。手仕事をしている職人の動画、林業従事者の動画なども、子どもたちを引きつける資料となります。

かつて受け持った子どもたちの手作り資料やその姿を記録した写真、動画は、発表内容に違いはありますが、楽しんで学習している子どもの雰囲気や自分たちにもできそうだという自信や可能性を感じることにつながります。社会科ワークショップがはじまってすぐのとき、かつて受け持った子どもたちが楽しんで学習している様子や、いきいきと探究の成果を発表している様子の動画で見せて、この学習がとても楽しくて力がつくものであることを示しました。教師が話して聞かせる以上に、説得力のある動画資料となりました。

子どもたちが記録をするための道具

ノートは、社会科ワークショップの家庭と学校との橋渡し役となります。子どもたちは、放課後などで取材に行くときにはノートを持っていき、家で調べたことはノートに資料を貼りつけています。ノートは、黒板に書かれ

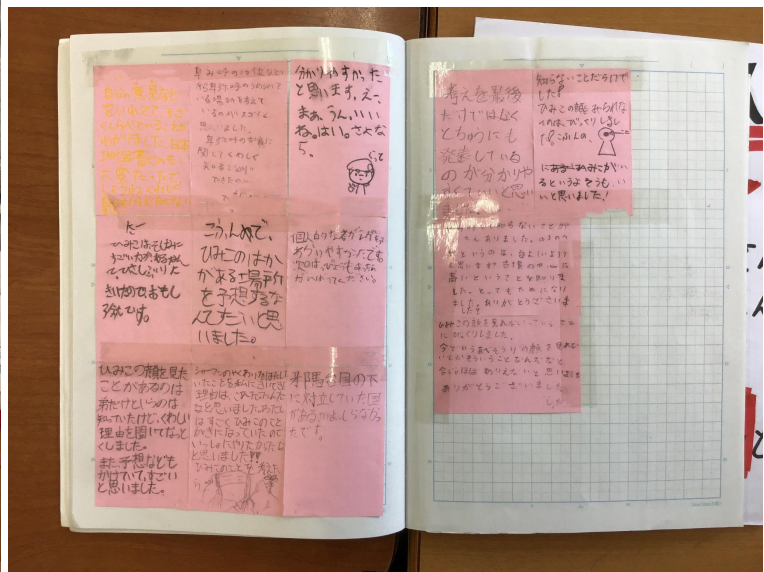
たことを写すという役割よりも、思いついた発見や疑問のメモ、資料や付箋を保存しておくもの、また教師や友だちとの意見交換の記録としての役割で使われています。

たとえば梨本先生は、子どもたちにカンファランスをした際、日付とキーワードや先生の提案などを子どもたちのノートに記録しておいて、子どもがあとで参照できるようにしていました。付箋紙に支援の内容を書き、子どもへのプレゼントにするといった方法も有効です。

最初、子どもたちは黒板に書かれたことを写すだけの道具としてノートをとらえているので、使い方に関する発想の転換に時間が必要となります。また、ノートに書いて頭を整理するといったミニ・レッスンも必要です。ノートは、自分自身で自由に使うことのできるツールであることに気づかなければなりません。そのためにも、工夫した使い方をしている子どものノートをコピーして掲示したり、新聞やチラシなどの切り抜きを貼っている子どものノートを紹介したりするといった方法で使い方に変化をもたらします。

ノートは情報をつなげたり考えを整理したりするため使われ、情報を保存する役割は写真の切り貼りやコピーに取って代わるので、子どもの取り組み方によっては、きれいに整理されたノートは必要なくなります。子どもたちのゴールは、ノートをきれいに取るのではなく、友だちに自分の探究を伝えたり、自分の生活や社会を変える行動を起こしたりすることにあるからです。

私の場合は、授業の終わりにある「共有の時間」に書く学習記録(振り返りや現在のテーマ、次回取り組みたいことなど)を書きます。付録参照。)は別のプリントに書くようにしています。そのほうが、ちょっと空いた時間などに、子どもたちの記録に目を通しやすいからです。



レシートを貼り付けて保管したノート

ファンレターをためておくノート

子どもたちのポートフォリオ用ファイルとして、ポケット型のクリアファイルも使っています。自分でつくった発表用の画用紙をしまっておいたり、お店からもらった紙の資料などを保管しておいたりしています。また、生活科の場合、子どもたちは落ち葉や種なども入れたがるので、クリアファイルならばしっかりと保存することができます。また、細かい付箋などもまとめて入れておけるので便利です。

ポートフォリオやノートは、自己評価を行ううえでの強力なツールとなります。学習の成果を、SNSのように自分で蓄積する力をつけるためにポートフォリオは非常に効果的と言えます(第10章 多様な学びを評価するを参照)。

プリンターは、授業時間中であれば自由に使えるようにしています(低学年などは許可が必要)。資料もそうですが、友だちが見つめてきた資料やまとめたノートなどもコピーをして、ノートに貼り付けている子どももいます。借りてきた資料の文字をノートに写し取ることは、時間を有効に活用できているとは言えません。必要な部分だけコピーにとって、ノートに貼り付けておけば、時間の節約になります。

また、カメラがあると、生活科で子どもたちが持ってきたドングリ、収穫した野菜、社会の「ごみ」のユニットで潰したペットボトルなど、実物を写真に撮ってすぐにわたすことができます。それをポートフォリオに入れる子どももいれば、そのまま発表に使う子どももいます。子どもたちが活動している姿の写真を渡すという支援は、自分の行動が認められているということを伝える力となり、子どもたちの探究的な活動を後押しすることになります。

ホワイトボードがあるとさらに便利です。発表のバリエーションが増えると、書いたり消したりできる道具が役に立ちます。私の場合は、たくさんのB6サイズのマグネットシートと、A2サイズの大きいホワイトボードを10枚ほど教室で使えるようにしていました。

教室外の環境

保護者を巻き込む

以前、4年生を受け持っていたとき、「神奈川県観光大使になろう」というユニットを行いました。観光大使になるためには、自分が選んだ市町村にどのような特産物や見どころがあるのか、また、それがなぜおいしいのか、なぜそこが見どころなのかなど、地域の資源をいかしたガイドをしなければなりません。

山尾さんは海が大好きで、友だちと一緒に海が広がる逗子市の観光大使になりました。本やガイドブックを見ているうちに、逗子のヨットハーバーやリゾートマンションなどを実際に見たくなり、友だちと一緒に見学に行くという計画を立てました。友だちと、どこを見に行くのか、どんな写真を撮るのかといった計画を立てたほか、行動計画を手作りのしおりに書き込んだりと、社会科見学をつくりあげる喜びを感じながら下調べの学習に打ち込んでいました。

二人のご家族の支援もあり、彼女たちは自分の足で逗子の街や海の景色を楽しんだそうです。彼女たちは家族を巻き込んで、自分たちのスタディーツアーを実行に移しました。

私は、テーマを子どもたちが決めて探究する学習を取り入れていて、可能なかぎりご家族にも協力をいただきたいというお願いを、懇談会のときに伝えてきました。また、それだけではすべてを伝えることができないので、「学級だより」で子どもたちの活動を紹介し、活動の一端を保護者に感じ取ってもらえるように努力をしてきました。

別の保護者からは、「スタディーツアーには行かなければならないのでしょうか？」といった問い合わせをいただくこともありました。気をつけなければならないことは、保護者を巻き込んでスタディーツアーに出かけることはノルマではないということ、子どもや保護者に伝える必要があるということです。

社会科ワークショップには子どもの情熱に火をつける力があるので、子どもが家に帰って、「行かないやいけない」という強い言葉を使って保護者を説得することがよくあります。教室の中でも十分に学習ができる学習環境を用意したり、その子どもが調べやすいテーマへ促してあげたりすることも大切です。そして、それ以上に教師と保護者がコミュニケーションを円滑に取り、子どもたちが学習に夢中で取り組むようにすることも学習環境をつくっていくうえにおいては大切なことです。

山尾さんのチームは、スタディーツアーで感じた海の様子やヨットの写真などを使って逗子市の観光大使になりきり、海を資源にした観光業について熱心にPRをしていました。また、逗子駅前で見つけた魚屋さんに並ぶたくさんのお魚についても触れ、「グルメもレジャーも大満足の街」であることを熱弁した様子は、社会科ワークショップが育てる子ども像の一つの形であるように思われました。

専門家や街の人を巻き込む

4年生では「ごみ」のユニットを学んでいました。ごみは子どもたちにとって身近な存在であり、学校でも家庭でも調べることができ、行動にも移しやすいということで、社会科ワークショップの導入としてはとても魅力的なユニットだと言えます。

今年も魅力的なテーマがたくさん出ました。「ペットボトルのリサイクル」、「焼却工場の仕組み」、「開発途上国のごみ問題」などです。そのなかで、「学校のごみを減らそう」というテーマに取り組んでいたチームが、「給食で残した食べ物はどうなっているのか？」と疑問をもちました。私自身も残食については気になっていましたが、実際に調べたことがなかったので、このテーマを選んだ子どもたちと一緒に取り組んでみることにしました。

学校の栄養教諭に尋ねてみると、ある食品リサイクル企業の名前が挙がりました。毎週、定期的にトラックで残食を回収してくれる業者があるそうです。その企業の名前をホームページで調べてみると、食品リサイクルのほかにも、紙やペットボトル、瓶カンなどのリサイクルも行っているということが分かりました。横浜市の外にある企業で、残念ながら、子どもの足ではアクセスできない所にある工場でした。

早速、学習への協力をしていただけられるように電話をかけてみました。私たちの探究的な活動がその企業のリサイクル施設にたどり着いていることを伝えると、工場の担当者はとても喜んでくださり、工場のパンフレットをはじめとして、食品リサイクルを通して生まれ変わった肥料のサンプルを送っていただきました。

残食の探究を行っているプロジェクトの子どもたちもとても喜びました（実際は、クラスみんなが喜びました）。そして、プロジェクトの子どもたちは、いろいろと聞きたいことがあるということで、たくさんの質問のなかから三つに絞り込んで、手書きのFAXで問い合わせをすることにしました。

「どうやって残食を肥料に変えるのですか？」

「集めた残食の量はどれぐらいになるのですか？」

「たくさんの学校が残食を0にしたらどうするのですか？」

リサイクル工場の担当者の対応はとても親切なものでした。メールでの回答、写真やパンフレットといった資料の添付など、そのテーマを設定した子どもたちと幾度となくやり取りを重ねました。プロジェクトの子どもたちは、食品リサイクルに携わる専門家から直接返事をもらうという機会を得て、それこそ水を得た魚のように取り組みました。

共有の時間には、調べたことを夢中になってクラスの子どもたちに伝えていました。また、貰った肥料を顕微鏡で観察したり、「これで野菜を育ててみよう」というアイデアを出したりしていました。まさに、実際の社会に生きる人と身近に接することができ、自信をつけたときの子どもの輝きでした。

私自身も興味が膨らみ、仲間の教師とともに、休日に工場見学に行くことにしました。工場では、大きなトラックが次から次へのごみを搬入してきます。たくさんのビニール袋に入った生ごみが手際よく運びだされてき

ました。学校の残食以外にも、レストランやコンビニなどで出た食品廃棄物が生々しく運び込まれてくるのを目の当たりにしたのです。

調理過程で出たフルーツのへたや皮、食べ残しなどがスタッフの前に運び込まれます。スタッフは、リサイクルできるものとビニールなどのリサイクルできないものに手際よく手作業で分けていきます。自分が食べ残してきたものがどのように処理されるのか、はっきりと目の前で明らかになるという現場でした。

私はビデオカメラにこの様子をしっかりと収め、子どもたちに紹介することにしました。(自分たちが出した残食を素早く処理しているスタッフの働く表情は、子どもたちの心に大きく響きました。)この日は、工場長とも話をすることができました。子どもたちの調べていることにも「協力したい」と言ってくださり、何と、来校していただけたという約束まですることができました。

そして、工場長の来校日、残食のテーマに取り組んでいた子どもたちが代表となって、自分たちの調べたことやこれからのごみや残食を減らすアイデアを発表しました。自分たちの出した残食を処理し、ごみのリサイクルの最先端に立っている専門家が実際に来ているのです。自分たちの取り組みや意見を聞いてもらうことに、かなりのプレッシャーがあったと思います。それでも、そのプレッシャーを楽しむかのように、日本で食品ロスが大量に出ていることや世界中には食べ物に困っている子どもがたくさんいること、そして学校の給食における食べ残しをできるだけ減らしていくための取り組みについて、子どもたちは意見を伝えました。

教室の外で活躍する大人にインタビューをしたり、自分たちの意見を聞いてもらったりすることには、子どもたちの学習意欲に火をつける効果があります。自分たちが本気で調べたり、考えたりしたことをぶつける相手として、その分野の専門家ほどふさわしい人はいません。

今回のリサイクル工場以外にも、歴史博物館の学芸員、郷土史の専門家、観光課の職員、地域誌の記者、消防団に所属する保護者、コンビニの店長、商店街のスタッフ、近隣にある保育園の保育士、自治会長、公園を管理する事務所の人など、社会科ワークショップや生活科ワークショップで取りあげてきた人はたくさんいます。

教師以外の大人と接することで、子どもたちは教師や保護者以外の大人というモデルを知ることができ、社会にはたくさんの役割を担う人がいて、それぞれの立場でより良い生き方を目指し、自立した市民として励んでいることを知ることができます。また、専門家のなかには、積極的に学校へ入っていきたいと考えている人や、機会があれば地域にある学校の力になりたいと願っている人もいます。双方にとってメリットになる連携ができると、継続して取り組めるようになるでしょう。

注意しなければならないこともあります。子どもたちが主体となっている探究的な学習で専門家と会うことができたにもかかわらず、専門家が専門領域の話をしてしまって、子どもが呆然としてしまうという状況です。ま

た、学習が深まっていない段階での質疑応答形式も、質問がほかの質問や意見と結びつかず、一問一答形式の深まりのないやり取りが繰り返されてしまうこともあります。

専門家の有効な役割は、子どもたちの探究の結果を専門家の立場として受け止めてもらうこと、そして受け止めたうえで、専門家の立場から子どもたちの状況にあった新しい問いや見方を提供してもらうことです。子どもたちは、専門家から問われることで、これまでの学習成果と新しい展望を感じることで、さらに自信と知的好奇心を膨らませることでしょう。

専門家は教師と違って学習環境づくりの専門家ではないので、事前にしっかりとお互いの狙いや意図を共有し、子どもたちにとっても専門家にとっても意義のある場にする必要があります。そのような場づくりは、教師の専門性を発揮して、しっかりとリードしたほうがよいでしょう。

学習環境を育てる

社会科ワークショップを続けていると、学習環境自体がより豊かになっていきます。教師は、手持ちの学習環境を育てていく視点に立って教材群を蓄積し、メンテナンスをする必要があります。

これまで、子どもたちに提供した資料、教師自身が探究した資料などは、かけがえのない教材となります。伝統工芸品をつくる職人が持っている、使い込まれた道具と同じです。

たとえば、私が受け持った子どもたちは数え切れないほどの発表を行ってきました。彼らのつくった資料や動画は、学習の楽しさを伝えるもっとも力のある資料です。教師本人が登場する写真や動画は、子どもたちの興味を引くのです。

また、大人にとっても探究は魅力あふれる体験であることを、教師自らの姿勢によって示すことができます。浄水場・自動車工場・歴史の舞台となった史跡など、子どもたちが興味をもつ材料はあらゆるところに眠っています。とくに、実際に触れることができるものは子どもたちをエンパワーさせます。パンフレット、新聞の切り抜き、間伐材の丸太、伝統工芸品、リサイクル試料、無農薬の水田で育った水生昆虫、延縄で使った釣り針、石器、雛人形、など、これまでいろいろな触れられる資料を使ってきました。

教師自身が探究を行うことで、カンファランスに使える魅力的な資料が少しずつ揃ってきます。子どもたちが手にすることができる資料棚に収めておきましょう。教師自身のポートフォリオとして、目の前にいる子どもたちに還元していくのです。

日常的に、教師自身が教材や資料に関するアンテナを張りめぐらせ、下調べをしたり動画を蓄えたりすることによって魅力的な資料棚ができあがります。

生活科ワークショップでは、地域にある商店と協力し、子どもたちがそれぞれいろいろなお店を担当して、商店の魅力を伝える活動を行いました。（「第13章 生活科ワークショップで学習を創り出す子どもたち（2年生）」を参照）教師自身が選択肢として準備したお店もあれば、子どもたち自身が強い関心を示したお店も含まれています。

学区内のお店とつながりをもつためにも、普段からできるかぎり学区のお店を利用するようにしています。たとえば、給食のない日に利用する飲食店、スーツの洗濯のために出すクリーニング店、家族に買って帰るパン屋、授業に使うものを買う雑貨屋、栽培活動に必要なものを買う花屋など、お店の人と面識があるとそのような授業への協力も頼みやすくなります。利用することで店主の人柄なども分かってくるので、安心してお願いすることもできます。

保護者のなかに保育施設を運営している人がいたときには、何人かの子どもたちが保育園に出向いて、「お助け隊」をするというプロジェクトを行うことができました。また、ある保護者が介護施設で働いていたので、あるプロジェクトの子どもたちが呼びかけて、クラス全員で歌を届けるというプロジェクトに発展したこともありました。

地域で商店や施設を運営している人はたくさんいらっしゃいます。そのような情報は、できるかぎり早めにつかんでおいて、個人的にお願いをすることも多々あります。また、このようなつながりは、のちのち役に立つ人脈となります。教師と保護者という信頼でつながる学習環境は代えがたいものです。ソフトの面でも学習環境をどんどん育てていくと、学習はどんどん面白くなります。